17
平成5年4月8日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（一六）

第二四則　雪峰看蛇

〔示衆〕

衆に示して云く、東海の鯉魚、南山の鼈鼻、普化の驢鳴、子湖の犬吠。常塗に堕せず、異類に行かず。しばらく道え、これ什麼人の行履する処ぞ。

〔本則〕

挙す、雪峰、衆に示して云く、南山に一条の鼈鼻蛇あり、汝等諸人、切にすべからく好看すべし。〔坐具を提起して云く、這箇はこれ債り来る底にはあらず。〕長慶云く、今日の堂中、大いに人あって喪身失命す。僧、玄沙に挙似す。〔塁ること三に過ぎず。〕沙云く、すべからくこれ我が稜兄にして始めて得べし。〔狐朋狗党。〕しかもかくの如くなりと雖も、我れは即ち不恁麼。〔別に一条の長あらば、すなわち請う、拈出することを。〕僧云く、和尚は作麼生。〔毒虫、頭上にて痒を措く。〕沙云く、南山を用いて作麼かせん。〔ただこの鼈鼻、なお分外となすのみ。〕雲門、柱杖をもって峰の面前に擬向して、怕るる勢をなす。〔何ぞ自ら己命を傷つくることを得たる。〕

今回は唐代末期の大禅匠、雪峰義存（八二二～九〇八）と、そのすぐれた三人の弟子たちに関する興味深いテーマのお話しです。ちなみに、雪峰義存に関する則は、この『従容録』では、今回の第二四則のほかには第五〇則「雪峰甚麼」、第五五則「雪峰飯頭」の二つがあり、合計三則が含まれています。

さて、義存は福建省泉州の生れです。泉州といえば、後に元の時代には国際的な貿易港として栄え、マルコ・ポーロが「東洋のベニス」と紹介したことはよく知られています。義存は出家して長い修行ののち、徳山の棒で知られる湖南省の徳山宣鑑から禅法を受け、福建へ帰って雪峰山に道場を開きました。

雪峰山は象骨山ともいい、南地では珍しく冬には頂に雪が降ることのある山です。現在は、福建省の省部、福州から車で八六キロ。いくつもの山を越えて二時間半ほ

どで山麓に立派な伽藍の崇聖寺があり、ここに僧尼一六〇名が居住しています。義存の肉身像（ミイラ）が枯木庵に安置されています。

むかし、義存はここで独特の厳しい禅風をかかげ、雪峰の名は唐末の天下に知られ、全国から多くの道俗が集まりました。この第二五則に登場する長慶慧稜・玄沙師備・雲門文偃の三名は、いずれおとらぬ雲峰門下の俊足ぞろいであり、すばらしいメンバーです。特に雲門は、のちに雲門宗の開祖となった高僧です。

さあ、万松の〔示衆〕をみましょう。

「東海のコイ、南山のマムシ、普化のロバの鳴きまね、子湖の犬ぼえ、これらはありきたりの話しではないし、動物のマネでもないぞ。その活手段がわかるかな。」といったほどの意味です。つまり、万松は古来禅門で有名な四つの禅機をあげ、それらをほめたたえているのです。二番目の「南山のマムシ」が、じつは「雪峰の看蛇」というこの則の本則で、その他の三つは、雲門・普化・子湖という三者によるすぐれた禅機です。雪峰のヘビという本則にちなんで、同じ動物に関する禅機を並べあげたのですね。

つぎに〔本則〕を、例によって意訳してみましょう。

雪峰「諸君！この山には一匹の猛毒をもったマムシがいるから、よく気をつけてみなされ。」長慶「今わたしは、義存さまにすっかり自分をとりあげられてしまったワイ。」玄沙「それは長慶さんだからできること。わたしはちがいます。」ある僧「玄沙さんは、どうちがうのですか。」玄沙「わしは、雪峰山なんか平気じゃワイ。」雲門は、雪峰に向かって杖でヘビを投げつけるようなしぐさをし、おそれるようなさまを示した。

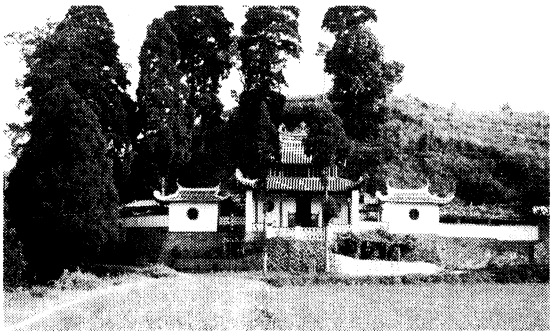
おもしろい話ですが、禅の問答は枝葉をとっていますから、それを補わないとわかりませんね。まず、雪峰のいう一匹のマムシとは雪峰自身のこと、つまり本来の自己、本来の面目ですから、気をつけて見よとは、修行者に対する老婆親切の語です。雪峰山には、たくさんマムシがいたのでしょう。

こういわれて、長慶があえて毒気にあてられて身も心も失ったというのは、妄想分別を離れた大死一番の心境でしょう。大死一番にして、はじめて自在な活作用のはたらきができるのです。ところが、これを聞いた玄沙は、長慶はエライがわしはちがう、ことさらに雪峰のマムシだけがわしに毒気をあてるのではないといった。つまり、マムシはどこにでもいる、本来の面目は一挙一投足のところに、宇宙いっぱいに遍満しているというのです。さらに雲門のしぐさは、杖をマムシに托して「ソーラ、マムシが出たぞ」とやり、マムシをおそれる風をしました。自分がマムシになりきって活動しているさまを示したのです。

こうみると、三者いずれおとらぬ態度ですが、宏智の〔頌〕をみると、おもしろい批評をしています。すなわち、長慶は勇少（及ばぬこと）、玄沙は大剛（過ぎたこと）で共にマムシを殺してしまったが、雲門によってそれが活きかえった、というのです。雲門の動作は仏法が自分のものになり切った自在のはたらきで、それはマムシという本来の面目のはたらきを、そのまま示したのをほめたたえています。

しかし、宏智の批評はともかく、わたくしたちからみれば、マムシの毒で死にはてた玄沙も、宇宙いっぱいがマムシのはたらきととらえる玄沙も、マムシになり切った雲門も、ともにマムシ使いの名人といってよいでしょう。いずれも、通常の禅の修行者たちの域をはるかにこえているからです。それと、マムシという現実に常に悩まされている毒蛇をテーマとして、雲峰とその俊足たちが命がけでこれにとり組んでいる姿勢に打たれます。

禅は本来の面目をさとり、それを自在にはたらかせることを目的とします。本来の面目はどこにでも遍満しているといっても、この仏のいのちに目ざめるためには、安閑としていたのではダメです。正しい信と行、これしかありません。お互いにマムシの坐りを、真におのれのものとしなければなりません。



義存禅師の肉身僧を祀る枯木庵

絵の中の禅

野田市　青木志郎

龍泉院を知ったのは、禅文化研究所発行の別冊「禅文化」坐禅のすすめによるもので八年前である。

親が初代の為、家に仏壇がないのをもの足りなく感じたのが仏教への関心の始まりだったようで、十一年前父が死に、位牌が置かれて、家の中心ができた実感を覚えた記憶がある。

白隠禅師の「夜船閑話」と言う本に、体験を元にした禅による健康法が書かれてあって感覚人間で自己管理に欠けていた小生には多いに役立った気がする。

夏目漱石の「草枕」を絵かきが競って読んだ時代があったと言われているが、禅僧の境地が小気味良く描かれていて小生には趣味深く読めた。

一九八七年十一月十三日の毎日新聞「雲水欧州を行く」に、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は日本の禅僧をローマのバチカンに迎えたとあり、翌年の二月十一日の「アジアの仏たち」では、今も岩くつに住むスリランカの僧を伝えていて、お釈迦さんの笑顔が目に浮かぶような気がした。

「周到な準備の後、真白なキャンバスに向かい、無言の対話の中に身を置く創作の世界」、「物を見る目を養う事により、人としての幅の拡大が計れる鑑賞の世界」、「銭を投資すればするほど、作品に対する愛着が増し日常に生きがいが感じられてくる収集の世界」（一九八四年に『絵画の道』に書いた）

龍泉院の参禅会を取材した作品「座禅風景」によって、現代美術家協会の会員推挙を受けた事は、椎名老師始め皆様にありがたく大変感謝しています。

「人間が人間らしく」のテーマでこれからも描き続けて行こうと意を強くしたのである。

お寺にきて

柏市　武田博志

二月九日未明、不思議な夢を見た。穏やかな表情をした青年が私の前に立ち、口を開けずに静かに言った。「私のそばで手伝ってください。」真正面に向きあったその人の目に魅せられて私は口をきけない。黙ったままうなづいた。やがて放心状態の私の前から姿が消えて、そこに居てください、という声が残った。

白い光の中で、その顔の周囲だけがはっきりとして、それもあっというまに消え去った。ただ分かっているのは、そこが龍泉院を指していることぐらいで、いつもみる夢と趣きは大分異なる。

妙に冴え渡った頭に意識を呼び戻し、今のは何か解き明かそうとした。すると二日前にあった懇親会の情景が浮かび、老師が参禅会に若い方を参加させたいという話を思い起した、求道心のある人は捜して寺に来、定着していくという意見のある一方で、積極的に若者のいる所へ出向いて働きかけるべきだという意見があった。聞きながら、私は若い人たちが次々と参禅会に集まる様子を漠然と思い浮べていた。

今の多くの寺は若者の心から遠

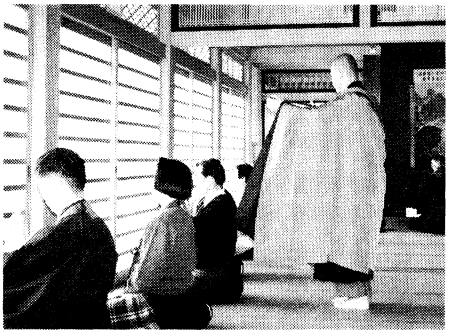
い存在になっている気がする。個人墓の増加、仏教ホスピス、人生一一〇番、他にイベントを企画する寺も少しずつでてきた。悩みを持った若者が頼るのは親・教師ではなく、同級の友人で、その友人さえいないと答える現代っ子は多い、心を開いて飛び込める場が寺ならば、どんなに素晴らしいことだろう。

中学生の頃に深く印象に残ったことばがあった。

天知る、地知る、己知る

どの先生がいったのか忘れたが、以来何よりも自分の行動を支える大事なキーワードとなった。他人の見ているなしにかかわらず、いつでも天地は黙って見ている。嘘をつけば自分で気づく、すべて主体としての自分に依る原因・結果なんだと。寺に足を運ぶようになって、説法を聞くと、自分が頼りとしたことばが仏の教えにそう遠くないと思えるようになった。

現代の世相はあらゆる所で金や物欲の狂奏曲がかき鳴らされ、それに巻き込まれずに社会生活を続けるには、我儘やかなりの意志の力が必要になる。人がより良く生活していくために編み出した生産様式・分業とは、技術革新、肥大した経済社会は一体何をもたらしたのだろう。かえって全般的な人の営みをとらえ難しくしたのではないだろうか。水や空気を汚す自然破壊を外への働きかけの結果とすれば、人種、階層の差別偏見、



成道会坐禅風景

権力へのへつらい、驕り、富の独占と人の醜悪さに満ちているものは人の内面から生じた。頭では地球を美しい出来事で満ちた星とする視点を持ちたいと願いながら、欲を捨てきれない。そんな自分や若者を支えるのは、静かに温かく、時に厳しい諸先輩の姿を眼近にし、仏の声を聞かせてくれるここなのだと夢は教えてくれた。話し相手を失った若者がお寺という場を心から人生の拠所とするには、今ここに集う参禅会員の以心伝心によってしかないと思います。

龍泉院に伺って

流山市　中嶌宏誠

十年前「坐禅のすすめ」（著者中野東禅老師）で龍泉院を知り、昭和五八年十一月から参禅をさせて戴いております。翌月の十二月四日には第一回の成道会があり、成道会にも参加させて戴きました。私にとっても意義深い行事になっております。昨年には木更津の真如寺で行われた二泊三日（十四炷）の大摂心会にも参加をさせて戴きました、次の大摂心会にも出席させて戴くつもりです。

龍泉院に伺ってから、今まで気がつかなかった、極身近にいる人の「行い」に気が付くようになりました。

例えば、その人は僅かな水を無駄にしないのです。ホースに余った水でもそのまま捨てずに如雨露に入れ、草花や植木に与えています。寒くなって来ると、草花や植木を室内に入れ陽の当たる所に置いています。仕事（会社）と家事の日課が終わると、草花や植木の葉を視て、緑が薄いと言って配置を替え、葉が尖ってきた、水を欲しがっている、と言って水を与えています。冬が近づくと部屋中に沢山の草花や植木が部屋に置かれます。また、普段は贅沢や無駄をしないで、三人の子供（長女二四才、次女大学三、長男大学二）を育てておりますが、「本人がアタック」すると、「この時しか、出来ない」と言って、本人の希望を聞き入れ、何でもやらせます。先行きがハッキリしていれば単身で国外の何処にでも行かせるのです。

また小生の都合でかなりの出費がある時でも何の理由も聞かずに準備し、経過も結果も聞かないのです。

私は龍泉院に伺い椎名老師に多くの教え賜り、今まで気の付かなかった貴重な事柄を知り、日々感謝をしております。また禅を通して知った、滴水老師が修行僧に教えた、水の大切さと自然に対する感謝の心にも触れました。

龍泉院との出合がなければ分からなかった「その人」。その人は、私より七才年下の家内であり「仏心がある」ことに気がつきました。

合掌

◆第十回成道会参加者一同◆

第十回成道会円成す

六年磨雪一片甎
忽爾暁星光現前
照徹毘盧無見頂
十方世界本然円
慈恩無量
初発心時成正覚
非思量処箭離弦

六年の磨雪、一片の甎、
忽爾として暁星、光現前す。
毘盧を照徹し、頂を見ることなく、
十方世界、本然円かなり。
慈恩無量たり。
初発心の時、正覚を成じ
非思量の処、箭、弦を離る。

回を数えて丁度十回目という節目の成道会が、昨年十二月六日午前九時から龍泉院にて行なわれました。

今回も前回に続いて、全ての法要配役は七名の会員によって務めていただきました。厳粛さの中にも暖かい雰囲気がただよう、まさに手作りの成道会となりました。

例年通り、報恩の坐禅の後、成道会法要、記念撮影、点心、反省会の順で行なわれました。

椎名老師のご法話は、成道会の意義の有無は、一人一人にとって真の法要になったかどうかにあること。釈尊の悟りがあったからこそ仏教が存在していることへの感謝。宇宙世界の有り方は真理、人間を含め万物は元素から成り立っている、これが仏様であること。私たちが仏様であるということは大変なことであることということを自覚し、仏法を信じ、実践することを人生観として欲しい。人のために生きるということは、教養もお金も必要がないし、何ものにも優る大きな価値のあることである等、悟りの本質と仏法実践の大切さを語られました。

点心後の茶話会では、緊張の糸を緩め、和気あいあいの内、各会員より、新たな決意や反省などの言葉が続きました。更なる精進を全員で誓って終了いたしました。

裏方を務められました、幹事・配役・写真係の方々に心より感謝申し上げます。

参加者　三五名

「明珠」の足跡をたどって

柏市　高野　千代子

明珠とは、真如・仏性・法性・本来の面目などのたとえである。常に円満で無欠・無余・表も裏もなく、キラリと光っている当体そのものである。

これは昭和六〇年四月八日龍泉院参禅会会報「明珠」の創刊号発刊にあたり、椎名老師が巻頭の言葉として記され、この宝珠をしてますます明光あらしめんことを願われておられました。今改めてこの会報を振り返らせていただくとき、そこには参禅に集う方々の真摯なお気持ちが珠玉の如くちりばめられ、ささやかな、本当にささやかな想いを随所に見ることが出来ます。

第六号（昭和六二年一〇月五日発行）には、故人となられた中川俊二先生が、「心と体の相関」と題されて、病気を直すにはどんなことがあっても、イライラせず、物事を深刻に考えず時の流れにまかせて善処していくことが大切です。人を恨んだり、憎んだりする気持ちは、結局自分自身の体に戻ってくることを忘れてはなりません。人生は、金や物では無い、いかに生きるか、過去に生きたことを清算し、生き甲斐を発見しなければなりません。ガンなどの難病を克服した人、死に直面し乗り越えた人は、人生の再発見と共に生き甲斐と感謝を、おのおの持っているのです。と記されておりました先生は九州大学医学部で、池見酉次郎名誉教授と共に「心身医学」の創立に努められ、本堂の一隅で坐禅に励まれておられた姿が目に浮かびます。

第九号（平成元年四月八日発行）には、タイ蚕糸研究所に行っておられた藤原公さんが「マイペンライ」と題された一文を寄せられております。異常天候にみまわれて東北タイの農民は、口数が少なくどんな悪条件がこようと、黙々と鍬をとる。この国にはマインペンライ（人を許す心づかい）という言葉があると……人を許すということ、なんとやさしいようでむずかしいことでしょう。

それぞれの年に行なわれた一泊参禅に参加された方から寄せられた感想では、いびきの三重奏を面白おかしく記されたもの、暁天坐禅で大太鼓の音に緊張した一瞬を記されるなど、その時々の本音が見えかくれして楽しく思いました。

単身赴任で遠く家族と離れて暮らさねばならない方は、仕事のストレスや寂しさの不安から辛い気持ちを癒すために坐ろうとする「為坐禅」には、やはり「ダメ坐禅」を感ずるなど……働いて、家族を養うことは大変なことです。

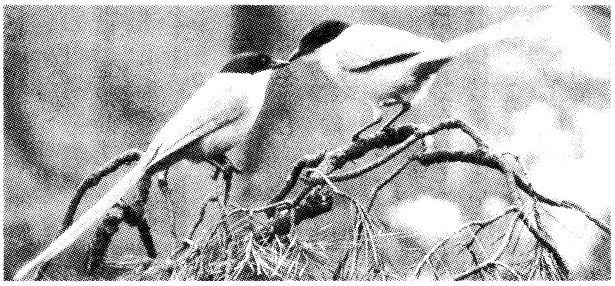
また「おふくろさん」「母上への手紙」等で定年退職された方が八〇歳を越える母上を幼児の如く慕われ続けその思い出を筆にたくすなどその一つ一つが優しく、人間らしく、きどらない作品に拍手を送りたく思いました。

まだまだご紹介したい珠玉の作品は沢山ございます。皆様もどうぞ、もう一度、「明珠」を読みなおされる機会をお持ちになりませんか。

坂村真民詩集より

春の泉

たたえられた春の泉には
夜になると
花よりも美しく星々がかがやき
朝になると
のどをうるおしにくる鳥たちで一ぱい
になる
ああわたしも身軽な衣にきかえて
春の谷をのぼってゆこう
いのちの泉を捜すため
一詩の世界を開くため



報土荘厳

松戸市　小畑節朗

昨年十一月に中川俊二先生、本年に入って一月、染谷はるさんが亡くなられた。

お二方とも亡くなられてから暫く後からお聞きしたので御葬儀にも失礼してしまったのは何んとも心残りでならない。

当参禅会が「入会自由、退会自由」と言うことで、各人が自己に親しむ「行」としての坐禅を行じる集りであるところから、世間一般で言う交際が稀薄であるのは仕方のないことであるかもしれない。しかし、昨今まで元気なお顔を拝見していて、急に他界なされたとお聞きすると、何か心に隙間風が吹き抜けて行く寂しさを感ぜずにはおられない。

中川先生は、九州大学で池見酉次郎先生と共に「心身医学」を研究され「心身医学」の草分けとして同学会創立に努められ、日本アレルギー協会理事としても活躍、元PL病院々長でおられた。

ありし日の染谷はるさん
（前列中央）

・写真は平成2年6月、一泊参禅会より

『アレルギー疾患の心身医学』『癌の自然退縮および長期生存例に関する心身医学的考察』など著書も多数。

ご自身も昭和四七年に胃癌の手術を受け、五六年には再発の疑いが出て、その時の不安から「ただ今ガン細胞の所見なし」のお墨つきをもらうまでの詳細を著書『ガンを生き抜く』で書いておられる。

我孫子中央病院におられた頃、熱心に参禅され、講演などで坐禅を休まれる時は『正法眼蔵』提唱のテープを採っておいていただきたいと、出張先から電話をかけてこられたこともある程で、今となっては思い出の一頁となってしまった。

染谷さんは、一月二四日に亡くなる二、三日前まで旅行を楽しまれ、亡くなられた日は、ご家族と夕食を共にされ、その後入浴中、心不全で急逝された由であった。

ご自身で、一泊参禅の時など、よく皆に話をなされたが、和裁の教室を長年に渉り開いておられた。

若い頃、東京に和裁の修行に行くとき父親から「東京から柏まで帰る途中には大きい川が何本もある。業ならざれば身を投げ死ぬ覚悟で帰ってくるな」と言われ、刻苦勉励したことなど、淡々と話をされていたことが思い出される。

昭和六三年、大雄山に一泊参禅。坐禅と共に余語翠巌老師の法話を聴聞しての帰路、小田原のさる中華料理店で打ち上げの小宴を行って、その乾杯の音頭を染谷さんにお願いした。曰く

「只今、幹事さんより、最年長であるということで、乾杯をせよとのご指名であるが、先程の余語老師の法話によれば、仏法の尺度で見れば八十歳も三歳も同じことと言われたではないか、年令ではなくご指名により乾杯をさせていただきたい。まだこの旅は終った訳ではありません。家に無事故で帰るが第一、皆様のご健勝を祈って乾杯。」

実に当意即妙、ユーモアをもって心良く乾杯の音頭をとられた姿が昨日のことのように目に浮ぶ。

お二方とも幽明境を隔てしまわれた。

中川俊二先生　行年七七歳、

染谷はるさん　行年八三歳。今は只、諸仏の洪名を誦して、その報土を荘厳させて頂くのみであります。　合掌

龍泉院参禅会簡介

一、日　時　毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐　禅　止　静　鐘　三声　坐禅
　　経　行　鐘　二声　経行
　　放　禅　鐘　一声　放禅

一、講　義　木版三通　開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く
　　講　師　龍泉院住職　椎名宏雄老師
　　平成五年正月より「即心是仏」の巻を提唱

一、座　談　自己紹介の後、茶を喫し座談
　　正午解散

一、参加資格　年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。

一、会　費　無料

一、成道会坐禅
　　月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は一二月五日）
　　釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（　）中は座談の司会者。

平成四年
・一〇月二五日　二四名（中嶌宏誠氏）
・一一月二二日　二九名（加藤健之氏）
・第一〇回成道会
　一二月六日　三五名
　成道会幹事　徳山　浩氏
　〃　武田博志氏
　写　真　中嶌宏誠氏
・一二月二七日　二八名（今泉房子氏）

平成五年
・一月二四日　一七名（寺田哲朗氏）
・新年会
・二月一九日　一四名　於　芳野屋
　平成五年々番幹事（中嶌宏誠氏）
　〃（宮本　茂氏）
・二月二六日　二四名（武田博志氏）
・三月二八日　二三名（川島勇治氏）

▼年番幹事も今年で早くも四代目となりました。昨年度の徳山浩氏、武田博志氏の両幹事さん大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。また本年度の新たな幹事さんは、中嶌宏誠氏と宮本茂氏の両氏に決まりました。本年一年間何卒よろしくお願いいたします。

▼第十回成道会も、前回に続いて会員が法要配役を務めました。練習は成道会の一週間前に龍泉院にて、椎名老師のご指導のもとに行いました。全員参加での練習は一回だけでしたが、各自相当練習された様で、当日はピタッと息の合うところを見せておりました。今年は他の方もふるって。

▼成道会では、椎名老師より「自選坂村真民詩集」を、また代表の高間様よりも図書の寄贈を賜わりました。心より深く感謝申しあげます。

▼会員の中川俊二様、染谷はる様が、逝去されました。寂しい限りですがご冥福を祈念します。

▼新年会で、椎名老師より、若い方への継承をとのお言葉がありました。今年は実践年です。

（杉風記）

●発行／天徳山龍泉院　千葉県沼南町泉81　☎0471(91)1609
●印刷／岡田印刷株式会社　柏市高田1116—45　☎0471(43)3131